

ガマのひとりごと

家相の話

こんにちは、ガマです。

今の若い方でも家相を気になさる方はけっこう多いですね。

ここは悪い、あすこも良くないと言い出しますと、浴室も便所も台所も置く場所がなくなり、間取りプランが出来ず、家相には泣かされます。

でも、出来るだけ悪い場所ははずす努力はしています。表裏門・裏鬼門に玄関をもってくることは、まずありません。

家の中心から南北と東西と2本走っている正中線上に浴室・便所・台所などの不浄物を置くこともさける様にしています。

表鬼門の「張り」や「欠け」や裏鬼門の「張り」もつくらないように努めます。

家相ではないのですが、4間×2間（42間、シニケン）の間取りや4畳の部屋（シノマは切腹の間といわれている）もさけています。

これらの家相などの由来は、中国伝来の風水や日本の忌詞なのですが、何か事故があった時、住まう人が気に病まれると困りますから…。

表鬼門である北東（うしとら）の方位は、中国においては万里の長城のある方向です。中国において騎馬民族の侵入に悩まされ、長城により守りをかためた方向ですから侵入口をつくってはならないのですね。

この思想が日本も伝わり、京都においては比叡山延暦寺、東京では東叡山寛永寺が表鬼門にすえられて、護国の役目をになっています。

また、不浄物を正中線上に置かないようにするのも、子（北）の方位はともかくとして、汚水や汚物を流すすべのない昔は、家の真ん中や陽の当たる場所にそのような設備をすえる不衛生を考えれば理解できる話です。

鬼門から玄関をはずしても、勝手口が鬼門にかかることはままあります。そのような時には、勝手口のかたわらに南天の木を植えて下さい。南天は「難を転」じますよ。



我が家のペット

クーの家出



カメラ目線のクー

今月もオスの雑種のシマ猫クッキー（クー）の話である。このクー、昨年のクリスマス・イブに突然、姿を消した。

「勝手に拾ってきて世話もせん、こんな猫しらん」と日頃憎まれ口をたたいている奥さんが一番心配した。

物置の中を見、サンルームの床下をのぞき、夕方になると「クーちゃん、クーちゃん」と呼ばわりながら庭を隅々までさがす。

「もういけん。どこで死んだんじゃろうか」と弱気の虫が顔にあらわれたのは30日。里帰りして来た息子にこぼしていると、その足元にまわりつくようにクーがいた。

「どこ行ってたん、どこ行ってたん」と奥さんはクーをかき抱きながら泣きじゃくった。毛並みに汚れたところもなく、クーは迷惑そうに顔をそむけて抱かれている。

私は思い出していた。これが2度目である。

「お父さん、クーが死んだんよ」と携帯に電話があったのは3年前の春。

帰ると玄関先のダンボール箱の中に横たえられたシマ猫の死体。目をカッと見開き、口からはダラリと舌がのぞいていた。まるで毒殺されたような苦悶の表情。

「Oさんの奥さんが呼びに来て、行って見たら隣りの庭で死んどった」

奥さんは涙と鼻水を流しながら説明をする。

私はというと、ダンボール箱の中の猫、「ちょっと感じが違う」という印象。

と、その時、桜の花吹雪の中、ブロック塀の上をノッシノッシと歩いてくる猫1匹、クーだ。その日の夜、泣きながらダンボール箱に猫の死体を納めた粗忽者の2人の奥さんは、スコップを持って汐入川の土手に行き、それをうめてきた。

サクラ・サクラをハミングしながら2人は穴を掘ったという。本当にノー天気。その話を聞きながら、「あの猫はどこ猫なのだろう」と私は思ったものだ。

我が家のクーは今も元気。夜は夫婦のベットにもぐり込み、耳元でクルクル・クルクルノドをならして眠っている。



「眠れない一族」

食人の痕跡と殺人タンパクの謎」

ダニエル・T・マックス＝著 柴田 裕之＝訳
紀伊国屋書店

イタリアのヴェネト州に 200 年にわたり「眠りを奪われる病」にかかり次々に死んでゆく一族がある。

発症が 50 代を過ぎてからが多く、子孫が絶えることがなくて現在に至っている。

今では全世界に 40 家族ぐらいのそうした家系があり、日本にも 1 家系があることがわかっている。

以前は、病気の原因がわからず「脳炎」「髄膜炎」「不安神経症」「統合失調症」などと診断され、「アルコール依存症」と疑われ、「精神障害」をとりざたされた。

現在では、プリオンタンパク質の形成異常からくる致死性家族性不眠症（FFI）と呼ばれる遺伝性のプリオン病とされている。

一般的には FFI に罹るのは 3000 万人に 1 人なのに対して、ヴェネト州一族は 2 人に 1 人なのだ。

この FFI とは牛における牛海綿状脳症（BSE・狂牛病）と同様の病気である。

より成長を促すために植物性タンパク質ではなく動物性タンパク質（肉骨粉など）を食べさせられた牛がかかった病気である。

またパプアニューギニアの未開部族のフォレ族は食人の習慣があり、「クールー（震える病）」という FFI に似た症状の病気で死んでゆく者が多いことがわかった。

さらに世界中のどの民族を見ても「ヘテロ接合体」の遺伝子を持つ人が多すぎる。プリオン遺伝子にメチニオンをふたつ持つ「ホモ接合体」よりも「ヘテロ接合体」の方がプリオン病にかかりにくい。「ホモ接合体」の人類を淘汰してゆく要因が人類共通の祖先にあったのではないか。しかもそれは、地球規模で起きたのか、人類がアフリカ大陸にのみ住んでいた初期に起きたのでなければならない。それが、50 万年前の人類の祖先による食人習慣なのだと推定される。

この本はある種のメディカル・ミステリーであると共に、ノーベル賞受賞者、A は他人の功績をうばってかえりみず、B は小児性愛者で性的虐待により逮捕されるなどの人格にも言及しており、興味がつきない。

食肉業界の利益至上主義とそれに癒着した政界のおぞましい状態。医学・薬学の世界でも利益至上主義という意味においては同様に、HIV（エイズ）のように罹病者が多い場

合と異なり、F F I の場合には研究が遅れているという現状。

他国の話としてではなく読み進める本である。

一点、これは私だけの考えなのかもしれないが、日本の人口の多くは「ホモ接合体」の遺伝子を持つという。

世界の文化・文明国の中で宦官という去勢した人間を制度の中に取り入れなかった唯一の国、日本が、食人という習慣を持たない人類が集まった国だとしたら、他者に対しての目線に他国の人類の持っていない「想い」があるのではないかと考える。

千の夢話

宿泊 初体験

こんにちは。最近、20歳下のお友だちができた中井 千尋です。「千尋ちゃん～」と遊びに来てくれます。

展示場に泊まってみました。お客様に「外断熱の家で泊まったらノドがカラカラになったけれど、展示場はどうですか？」と聞かれたのがきっかけです。

展示場は、ダイライトを全面張りにし、気密性を高めています。柱・間柱の間にロックウールを詰める（写真参照）

充填断熱（内断熱）の家です。外張り断熱（外断熱）は、家全体を断熱材でくるみ、室内を魔法瓶の中のような状態にしますので、高气密・高断熱になりますが、乾燥しやすく、ノドのイガイガ感が気になる方もいるようです。充填断熱の家は、そこまでの気密性はなく、すきまからの通気が生じますので、外気の湿気も入りやすくなると言われています。

とりあえず、今回は乾燥具合を確かめるため、湿気を吸う無垢の木や珪藻土を使っている1階で寝ました。特にノドが乾くわけでもなく、夕方6時にいったん暖房を切ったのですが、4時間後でも家全体が暖かかったので、そのまま着替えて寝られるほどでした。

充填断熱と外張り断熱のメリット・デメリット、いろいろ言われていますが、一つだけ言えることは、土壁だけの実家と比べた場合、実家は寒いし、光熱費がかさむし、結露しやすいし。だから、断熱は必要だということ。私の実家のように築30以上たつ古い家では、窓をペアガラスにし、サッシを樹脂にするだけでもずいぶん違うといえます。実家では、夜、8畳間で暖房を26度にしていて適温。展示場では、20度で1階全体が暖かい。冬、実家と展示場で、断熱性の違いをまざまざと実感しています。



ブログ「親子で起業 奮戦記 ～帰りたくなる家造りを～」 <http://yu-rinhome.seesaa.net/>
(ユーリンホームで検索してみてください)